

ので、悪いやうにする気はないのだが、お前さんの方でいやだと言やア仕方がない  
『伯父さん』

『なんだよ八釜しい』

歌子は少時考へて居たが、

『ちやア倉持さん斯うして下さい、明後日の夕方までにお金を調へるかまた貴老のお望みどほりにするか、二つ一つにいたしますから』

『明後日の夕方？よござんす、ちやア明後日まで待ちませう、今度は間違のないやうにね』

歌子と正雄とが漸くのこと倉持に別れて家に歸ると、家の方には一人の男がまつて居た、夫は先刻ポストの蔭で二人の様子を見て居た人物だつた。

(四六) 新聞 うり

博多瓦町の櫻井の家の戸口に立ち、二人の歸るのを待つて居たのは謙吾だつた、彼は飛白の單衣に軟い夏羽織を着、バナマの中古を冠つて居た。

謙吾の二度目に猿渡家の蛇の離亭を逃げ出してからと言ふものは、歸るに家なく眠るに室なき蕪當同様の身分となつて了ひ、甲の親戚の家に三日、乙の友人の家に五日と、言つた風に諸所を浪々すべく餘儀なくされるに至つて居た、自分のためには響の子ではあり一時は斷然語を交すまいとまで決した歌子も、謙吾が此頃のやうな境遇になつたのも皆な櫻井家を庇つて呉れた崇りと考へつくと流石に同情しないでは居られなかつたので、此の頃では介意なく出入らせて居た、謙吾もまた元來歌子に對しては氣の毒でたまらなかつた故、自分の力のおよぶ限りは、櫻井家の留守宅のためには骨を折らうと決して居た。

『あら、謙吾さんで居らつしやいましたか、どうもすみませんでしたね、一寸と母のお葉參りに參つたもんですから』

『あ、左様でしたか、非常に待ちましたよ』



「伯父さん、其様に待たんですか」

正雄が懐かしげに謙吾の側に寄る中に、歌子は戸締りを外して内に入り、

「さア、どうぞお入り下さいまし」

「はア、有難う」

「伯父さん、お入りなさいよ」

謙吾は正雄に手を曳かれつ、内に入り、火鉢の向ふに坐ることになった。

「どうも先日は失禮いたしました」

と、あらためて歌子が挨拶をすると、謙吾も亂れた様子はなく、

「僕こそ」

と、禮をかへしてから、

「左様ですか、お墓参りでしたか、夫は結構でしたね」

「結構でもございませぬけれど、餘り御不沙汰をいたしましたから……櫻井の家も

何日までも斯様な風で居りますので、地下の母も嘸も悲しうございませうと存じま

すとお墓参りをいたします度に……」と聲が曇る。

「歌子さん、其のことは言つて下さるな、櫻井家をかう言ふ悲境のどん底まで落し

たのは、皆な父のやり方が酷であつたばかりなのに、左様仰有られると僕は實に

辛くつて耐りませぬ」

「伯父さん、僕はね、先日天神町へ行つたら新聞賣子の募集がありましたから、新

聞の賣子にならうと思ふのよ、而して少しでもお金をとりました、家のために働く

考へです」

「君が？」

「え、」

「賣子なんぞに正雄君がなれるもんかね、伯父さんはね伯父さんの家の阿父さんが

正雄さんの家を斯様なにしてつたんだから、何様なにでも盡しますからね、心配

しないで居るがいです」

「でも 伯父さん、姉さんは伯父さんの御厄介になつちやアいけないいつて言ふんで



すもの』

『いや、姉さんは何と言つても、僕アすゝんで御世話がしたいのです、先刻もお寺の門の此方のはうで、姉さんと正雄さんとか、例の倉持のために苦しめられて居るところを拜見して、一入其念を固くしたですよ』

『あら、ぢやア先刻の……』

『え、すつかり様子を偷聴したです、實は同情の念にたへませんよ僕もかうして浪々の身體ですけれども歌子さんや正雄さんのお困りになるのとは違ふ、僕ア父の大罪を償ふために、正雄さんや姉さんのためには盡します、ねえ、歌子さん、僕は貴女に折入つておねがひがあります、是非肯いて下さい、斯う言つたらまた情實が纏綿すると思し召すかも知れませんが、以前の謙吾でないと思つて肯いて下さい』

『……………』

『願ひつて何に伯父さん』

正雄は口を出した。

(四七) 新聞うり

『正雄さん、貴方は黙つて居らつしやい』と歌子は正雄を背後の方に却けて置いてから、

『あのお願ひと仰有るのはどう言ふことでございます』

『いえ、他ぢやアないのです、實は折があつたら僕の眞の精神を貴女の前に告白して、今までの誤解をとかうと考へて居たのですが、不幸にして今日まで其の機會がなかつたものですから、ついでに其のまゝになつて居たわけです』と前置してから更に、

『實のところ唯今も申し上げたとほりに、櫻井家の目今の御境遇には一方ならぬ御同情して居るわけで、父の仕方が恨めしくつて耐らんです、併し父は父僕は僕、父とは何の関係なしに、僕は僕だけの考へをもつて、歌子さんに臨みたい精神なん



です、是れに依つて貴女をどうのかうのと言ふ、所謂野心的考へでなしに、父林作の櫻井家に對する罪を償ふと言ふ側からして、可哀相だの氣の毒だのと言ふ、口先だけの御同情でなしに、物質的に盡したいと思ふのです、露骨に且つ分り易く申して了ふと何です、櫻井氏が成功して御歸宅になるまでの間を、僕の方で此の家をさへやうぢやアありませんか』

「……………」  
歌子は何とも言はずに俯向いた。

正雄は温順しくして黙つて居る。

謙吾は更に、

「兎も角も櫻井家と猿渡の家とは、あ、言ふ妙な關係になつて了つたのですから、僕だけはと言ふ考へで居やうとも、矢張り猿渡の家の人間には相違ないのですから、其人の厄介になることは、貴女の居く思し召さないのは分つて居ます、ですから僕が願ふのです、僕を精神を披瀝して……眞の心の底を叩いて……支へると明言

する以上は、今後の維持については勿論、今現に苦しんで居らつしやる、倉持の方の一件も解決させて了ひます……わけはない話しなんです、貴女が僕を猿渡の家から、僕の同情をかつて下さらないわけはなからうと思ひます、實は小花からも懇々話しがありません、出来るなら助けて上げて呉れと言ふ……併し小花から話しがあつた、めに其の氣になつたんではなくて、元來僕は其の決心で居るのです、また自分としてもです、あんなとるに足らん女の藝妓風情でさへ、櫻井家の苦境に同情するあまりに、身を犠牲にして佐世保へ行つたぢやアありませんか、あれを見るにつけても僕ア黙つち居られんのですよ、ね、歌子さん、大概僕の心の底はお分りになつたらうと思ひます、正雄君に新聞うりをさせたところで何になるもんですか  
貴女……」

「い、え、正雄に新聞をうらせませすからにやア、私も夫に相當した仕事を目つけ、身を粉にして働く考へでございませす、而して二人して一生懸命になりますれば、斯



「様な小さな家の一軒やそこら張つて行けないことはなからうと思ひますわ」  
 「夫りやア極端に行つたら出来るでせう、而し僕は得策でないと思へます、實は僕  
 はなんですよ、父はあのとほり不正な人間ですし、いくら諫めても肯いては呉れま  
 せんしかたがた、今櫻井家の問題さへなければ、父の居る此の土地を放れやうかと  
 も考へて居るのです、けれど貴女や正雄さんのことを思ふと、決然として去る氣に  
 なれません、と言ふのは一つは何です、父が悪黨だからして、其の子も定めて悪黨  
 だらうと思はるゝのが、如何にも心外でしてね、どうかして自分だけは善人である  
 ことを世間に認めさせたいのです、同時に貴女にも承認していただきたいのですよ  
 歌子さん、どうしても貴女は僕の厄介になるのを屑しと思し召さないのでですか……  
 ね、歌子さん……夫れでも未だ僕の心の底がお分りにならないのですか……未だう  
 たぐつて居らつしやるんですか……」

(四八) 新聞うり

「いえ、うたぐるの分らないのつて、決して其様なわけぢやアございませんけれ  
 ど……先づこの櫻井の家と猿渡家との關係からお考へ下さいまし、兎も角も福岡で  
 人に知られた櫻井の家が、斯様な猿淺しい姿になつて了つたのは、そ、其の點を考  
 へますと……何事も夢と諦めやうとは思ひますけれども、矢張り人間は淺慮だもん  
 ですからね……第一……飯盛岳に居らつしやる父の胸になり、地下に眠つて居りま  
 す母の心などを察しますと、どうも何んでございませすが……小花さんからお話し  
 があつたのですし、貴方のお心だけは克く分つて居ますけれど……私は櫻井の家の  
 祖先や両親に對しまして、何となく申しわけがないやうで仕方がございませんから  
 「斷然厚意を斥けやうと仰有るのですか」  
 「いえ、斥けるの何のと申しまして左様いふ意味ではございません、けれど何とな



くすまないやうな気がいたしますので……」

「すまんから断る……」

「唯今は御厚意だけ頂戴いたして置きまして、私と正雄との身體の動く間は、一生懸命に働いて、自分の力だけで切り抜けて見たいと、かう考へますのでございませぬ……」

「折角の御厚意でございませぬから、おうけしたいのは山々でございませぬけれど……」

「警の子の厚意だからいやだと仰有るんですなア」

謙吾の聲は少し強くなつた。

「いえ、そ、左様いふわけぢやアございませぬ」

「だつて左様とより外とられんぢやアないですか、小花の厚意ならうけても、謙吾の厚意はうけるわけにいかんとなると、僕にやア左様としきやアうけとれんです」

「……………」

「ね、左様ぢやアありませんか、左様とるのが至當だらうと思ふのですよ、仕方が

ありません、事實林作と言ふ悪黨の子ですからなア」

「あら、左様おとりになると……、御厚意は御厚意で有難く頂戴いたして居るのでございませぬ、是が單に貴方と私との關係ならばどうでも宜しいんですけれども、此の際、少櫻井の祖先と申すことも考へさせて下さいまし、父がああな階になりましてあんな無理な仕事にかゝりましたのも、蹂躪された櫻井家の家名を挽回したいばかりです、左様いふ矢先で居りますのに、此の上更に猿渡家の貴方から金錢上の御援助を仰ぐと申すことは、櫻井の家の先祖に對してすまんばかりでなく、第一父正澄に對して申しわけがございませぬ」

「ですから猿渡の家の人間でない、全然他人の資格で、……寧ろ僕は夫を希望するのです……」

「併し世間では左様とりませぬ、唯だ私がかう申し上げますと、一概に強情な女だと思し召すでせうが、私の胸の中には本統に辛いのです」

「僕の方が一層つらいだらうと思ひます、ぢやアどうしてもおうけになるわけにい



かんと仰有るんですね」

「どうぞ今暫らくこのまゝにして置いて下さい、私にも多少考へもごさいませ

し」  
「おうけにならなければ強ておす、めはせんですが、差し迫つて倉持の一件はどう

するお考へです」  
「相談をかけたところもごさいませうしいたしますから」

「左様ですか、ちやア仕方がありません、貴方の御自由になさるがい、でせう、其

の中にお伺ひするとして今日は是れでお暇します」

謙吾は失望しつゝ立ち上がった。  
「伯父さん、最う歸るの、もつと遊んで居らつしやいなね」

正雄は謙吾の腰のあたりに纏りついた。

(四九) 新聞うり

「私はもつとあそんでから歸りたいんだがね、姉さんの御機嫌が克くないんだも

の」  
と、謙吾は何か意味でもあるやうに、私と言つたり僕と口にしたたり、時々其の語

を變じつゝ、  
「正雄さん、一寸と……君に一寸と話があるから、一寸と……、一寸と……」

謙吾は正雄を指先で招きつゝ、直ぐに屋外へ連れ出した、歌子は別に夫をとゞめ

やうともしなかつた。  
何時しか日が暮れかゝつて、櫻井の家の入口の前にあつた、鬱然り生ひ茂つた無

果樹の葉蔭に、微かな夕月がかゝつて居た、

謙吾は直ぐと無果樹の木の下に行つた、後から追ふやうに出て來た正雄は、



「伯父さん、何に……、話すことつて……」

と、猶豫せずに促すと、

「話すこと、言ふのは他ぢやアないんだがね、姉さんは何所からかお金を借りる約束でもしたのか」

「家の姉さんですか……」

「あ、」

「僕、どうだか知りません」

「知らない」

「え、」

「ぢやア倉持の方の借りはどうするんだらうね」

時々入口の方に注意し乍ら言つた。

「なんでも姉さんの言ひますには、姉さんが何所へか勤めるんですつて而して姉さんは月給をとり、僕は新聞をうつつてお金をして、而して返す積りなんですけれど、

今日も倉持が催促したの、伯父さんも知つて居るでせう、家のお寺の横手のところで逢つたのを……」

「夫は知つて居る」

「左様でせう、あのとほりなんです夫でね伯父さん、明後日の晩までつて約束したの……知て居るでせう」

「うむ、夫も聞いた、其様なことを言つて、的があるんらい、けれど、的なに其様なことを言つてどうするつもりだらうね、今の姉さんの様子から言ふと、伯父さんが斯様なことを言ふのは餘計なことかも知れんがチャンと金の出来る見込みがついて居るのか知ら」

荐りに金の出来るか出来ないかを気にして居る。

正雄は無頓着な語氣で、

「どうですか僕は知りません、僕は早く新聞を賣るやうになつて、家のために働きたいんですけれど」



「君な、ぞが新聞を賣つたつて何程になるもんか、姉さんが頑固だからなア、僕の言ふとほりになつて了へば、姉さんだつて困らないし、正雄君だつて新聞なんぞ賣らんだつてい、のだ、而して現状維持でやつて居るうちにやア、阿父さんの方から何とかお便りがあるよ」

「ちやア僕姉さんに左様言ひませうか」

「機會があつたらすゝめて御覽……僕ア決して君だの姉さんのために悪いやうにやしない考へだからね、私を信じて呉れなきやア困るよ……、夫は左様と未だ阿父さんの方から何ともお便りはないかね」

「え、未だ何とも……、姉さんも心配して居らつしやるの、あんなにお齡を召して居らつしやるんですから、若しか途中で病氣にでもなつて居るんぢアないかつて」

「さうね、何とも知れんわ、何にしる姉さんの強情にやア困つたもんだ正雄君も一つ骨を折つてみて呉れないか、姉さんさへ承知すれば伯父さんはお金を出して上げやうと思ふんだ、伯父さんは伯父さんの阿父さんが悪いから、其の罪を償ふために

するんだからね……あ、左様々々、差し詰め伯父さんにたのまれて呉れないか、一つ君にお願いがあるんだがねえ、どうだい……」

正雄は謙吾の顔を睨と見上げるのであつた。

(五〇) 天 幕 生 活

彼方の家でも此方の家でも、一齊に焚き出す蛙遣りの煙が、低い軒端を廻り廻つて、右と左に家々の灯が輝き出すと、今まで夕月が不鮮明だつたが、段々其の輪廓を明かにして來た。

なんでもないのでよ、是れを姉さんに渡して呉れさへすりやアい、んだ」

言ひつゝ、謙吾は懷中を探つて何か紙に包んだものを取り出し、夫を正雄の方に差し出した。

「是れを姉さんに上げて下さい、今差上げやうと思つて實は用意して來たんだが、



あんな調子ぢやア私が出したつてうけとつて下さるわけはないし、君に託するのが一番だ、一つ君を煩はすとしやう、其方が得策らしい』

正雄は怪訝な氣色であつた。

『是れ何です、伯父さん』

と、何か恐ろしいものでも示されたやうに、手を出してい、かわるいかさへ決しかねた體帯包を見たり、謙吾の顔を見上げたり、而して手を出しかねて居る。

『正雄君、何を君其様なにか考へて居るんだ、別に恐いやうなものが入つて居るんぢやアないよ』

『だつて伯父さん、貰つて可いか否いか僕にやア分らないんだもの』

『可いから斯うして出して居るんぢやアないか、心配することはないからうけとるさ』

夫でも正雄はうけとりかねて居る。

『さア、世話をやかさずに早くうけとつて呉れ、而してね、姉さんのところへ持つ』

て行つて渡せばい、のだ君が子供の癖に新聞うりになんぞなつたり、姉さんがまた女の癖に勤めなんぞしないだつてい、んだ、なんでもい、夫さへもつて行きやア分るんだよ、中に鉛筆で細かく書てあるから、さア、早くうけとるんだよ』

つき着けられて正雄は後しざりをし、

『本統にい、の』

『本統だとも、誰か構虚なんぞ言ふもんか、可いからかうして出して居るんぢやアないか、さア、うけとつたうけとつた』

謙吾は無理やりに件の帯包を正雄の手首に掴ませた、正雄は捨てるわけにも行かないので、不承無精にもつて居る。

『夫からね正雄君、君だけに一寸と話して置くが、直ぐに話さずに好い機があつたら話して呉れ玉へ、實はなんだよ……未だしつかり決まつたわけぢやアないがね、伯父さんは伯父さんの阿父さんと衝突して家にも居られないし、左様かと言つて福岡に居るのもつまらないからして、何處かへ行かうと思つて居るんだよ、夫でね、



此のま、伯父さんが正雄さんの家へ足ぶみをしなかつたら、其所へ行つたものと思つて呉れ玉へつて」

「何所へ行くの」

「夫りやア愈々先方へ行つたら、正雄君のところまで必つと知らせるよ、だから正雄君と僕とは兄弟のやうに交際して呉れ玉へ」

「だつて伯父さんは大人ぢやアないの」

「其所が面白いところなんだよ」

「おかしいなア」

「少しもおかしいことはありやアしない、併しそいつア未だ確定したわけぢやアないんだから、兎に角其の紙の中に入つて居るものは大切なものだから、直ぐわたしと呉れ玉へ、紛失すと大變だよ」

正雄は仕方なく首肯した。

「伯父さん、最う家へ入らないの……」

「入つても仕方がないから此のま、歸らう、また来るかも知れないよ、ぢやア必つと渡してお呉れ」

謙吾は斯う言ひ捨て、立去つた。

正雄は其の後姿を見送つて居た。

魔島縣と宮崎縣の境にある、高千穂嶽のみねつゞき、飯盛岳の麓を距る半町ほどの森林中に天幕を張り、其の下に寢室やら炊事の道具などを並べて、此の二月ばかり前から金鑛探検の仕事にかゝつて居る一隊がある。

(引續き終編を読まれたし)

舞 風 (後編) 【終】



大正六年六月五日印刷  
大正六年六月十日發行

（定価五十五銭）

### 樋口隆文館 營業案内

#### 貸本營業の方又は取次 販賣

御取引を開始やうと思はる方は郵券三錢御送り下されば、早速に御直目録を御送りいたします。  
樋口隆文館は日本に於ける唯一の貸本向小説専門の御問屋でありますから、貸本向の小説なれば東京版でも大阪版でも一切取り扱へて御安くいたします。

樋口隆文館は自家出版物のみにては現に七百種以上所蔵して居る者です。御意欲な御書は御意欲な御書へ料を御知らせ致します。御取引を願ひます。樋口隆文館は毎月御書を出して呉よ、まだ出ぬか、まだ出ぬかと、やかましく御催促になつて居りましたる愛讀者御待兼の後編を、今回新販賣り出しましてございますから、どうか賣切れと成りませぬ内に、早々御買求めあらんことを

#### 發賣元

大阪市南區阿波中道  
二丁目四番地  
荒木佐兵衛

#### 樋口隆文館

（電話南六七九九番）  
（電話南六八七九七番）

#### 有所著作

【附奥後風ひ舞】

著者 遠藤柳雨  
發行者 大坂市南區阿波中道  
二百二十四番地  
樋口源次郎  
印刷者 荒木佐兵衛

後風ひ舞】

#### 渡邊歌禪君 著 井川洗屋君書

### 雷鳴六郎

全二冊共既刊  
實價各一冊五十銭  
郵送料各一冊六銭

本書が如何に面白いかと云ふことは、讀んだ御方に聞いて貰へば分る、早く御書を出して呉よ、まだ出ぬか、まだ出ぬかと、やかましく御催促になつて居りましたる愛讀者御待兼の後編を、今回新販賣り出しましてございますから、どうか賣切れと成りませぬ内に、早々御買求めあらんことを

#### 中村兵衛君著 長谷川小信君書

### 妻の罪

極彩色木版畫挿入  
實價五十五銭  
郵送料六銭

濫良貞淑の賢夫人として、模範的家庭の女主人公として、令名高かりし清見夫人の長子も、悪魔の呪咀か邪神の誘惑か、あはれ或動機に於て或重大なる、悔いても及ばぬ罪を犯した、嗟、傷まじや、此善良無垢なりし良家の妻を騙つて、永久に汝ひ得ざる罪惡の深淵に、何者か敢て赴かしめ

#### 神戶又新日報 歌川國松君書

### 初編 鱗與之助 次編 乳守のお仙 終編 池沼鯉之助

木版極彩色挿入  
美一冊 實價四十五銭  
三冊同時に御注文の方は内地に限り送料不取

本編は千里見透しといふ、神奇不可思議の怪術を行ひし、鱗與之助の面白き一代記であつて、事の發端は、古來神話的の怪傳説ある、印磨沼なる壺ケ淵の怪物をば獲殺したるよりはじまる、編中に活動する人物には、勇士あり、孝子あり、義人あり、俠客あり、苦節の美人あり、亂倫の妖婦あり、現代千載、各有趣味の大活動をする、頗る面白き多人物向の小説で、其文章も一種平易な言文一致体です。から讀物のみを讀んで居られる人にもわかる至極通俗な面白い讀物です



江見水蔭君作 八幡白帆君書

# 探偵の娘

全二冊

木版彩色挿入美本  
定價各冊  
四十五錢宛  
送料 一冊二付六錢  
二冊二付八錢

米國より新歸朝の飛行家と化て、甘々と華族の令嬢を弄ばんとする大悪黨あり、外面は如菩薩にして内心は如夜叉なる泥蟹龍子といふ大毒婦あり、稽智の天才眞に驚嘆すべき蛛の子仙太なる悪少年あり、動物の生血を搾り取て喰すべき或る秘密の發明に苦心しつゝある怪奇不思議の老異人あり多敷の部下を有して兇猛比すべき無く、其名も恐ろしき黒蛇伴作といふ、土間に潜める盲目の洋賊あり、著者が獨特なる神奇幽怪の筆は、かゝる人物を隨所に躍動せしめて、以て讀者をして、變幻恍惚の境に遊ばしめん、乞ふ一讀せられよ。

渡邊 默禪君著  
長谷川 小信君書

# 事實美人魔

全二冊

實價各一冊四拾五錢 郵税一冊六錢

さなくとも。女は魔性の物といふに。わけて本編の女主人公は、里に千年海山に二千年。三千の年劫を積んで背には甲羅が生え。尻尾は定めし三ツ又に裂けても尻やうかと云ふ。世にも不可思議なる一箇の美人魔！あはれ此の怪美人の物凄き怪腕に弄ばれ。甘々と。生血を殘らず吸ひ盡された。楊句の果にも未だ眼が覺めず。可惜生命までも棒に振らうと云ふ痴漢は。そもや奈邊の甚麼人？。

匿名子君作 歌川琥舟君書

# 可憐の棄兒

全三冊  
木版彩色挿入美本  
實價各一冊十五錢宛  
送料三冊二付八錢

あ、薄命なる可憐の兒よ、彼は如何にして冷酷無情なる生の母に棄てられ、又如何にして慈愛温き血肉の父と別離の憂き悲みを見たか、親は無くとも子は育つとはいへど、父母に離れて只一人、影も淋き孤兒の行末が、如何に凄慘にして且つ悲哀なるかを見られよ。

橋本埋木庵君作 歌川琥舟君書

# 悲劇片破れ月

木版彩色密書挿入  
定價五十錢  
送料六錢

これは東京柳橋で、俠藝家と云はれた丁字屋の『小いね』に關係した、悲劇的な事實小説で一冊で讀む物でございます、他店にも類似の題の物がありますから、御購求の節には、大阪樋口隆文館發行の物と御指定を願ひます。

橋本埋木庵君作 八幡白帆君書

# 毒百合

全三冊

木版極彩色密書挿入  
實價各一冊四十五錢宛  
送料三冊二付八錢

昨日の淵が今日の淵と、變る浮世の飛鳥川、水の清と人の身の、落ち行く末は分らぬもの！  
東京芝神明の矢場で評判の女、其名は優き若柳のお菊、生辨天と仇名せられて、虫も殺すまじき如き苦薩の美人！それが恐るべき殺人の大罪をも犯して世にも稀なる毒婦と成果てんとは、吓、境遇の罪か人の罪か、彼女をして、かくも墮落せしめし動機はそも何？其所に凄艶にして且つ悲哀なる、罪惡と戀愛との物語があるのです！！



渡邊 巖 禪君作  
長谷川 小信君畫

# 巖の松風

全二冊

密書挿入頗美本各一冊四十五錢宛送料二冊二付八錢  
本書は新聞でも大評判、又劇に演じてても非常の大當を取つた頗る面白い悲劇小説であつて主人公は華族の落胤で高柳欽一といふ帝大の學生、それへ命もと打ち込んだのだが下宿屋小町と評判の美人で年は十八お峯と云ふ尤物、その又お峯に年にも耻ぢず、眼も鼻も鼻も鼻も鼻も鼻の、高倉といふ高利貸の好色老婦、また其他に、藝妓、悪魔生、刺客、急車夫、といふやうな、種々雑多の人物が、記号柄繪と入り亂れて大活動をする至極面白い小説でございます。

大阪新報記者  
行友 李 鳳 君 作  
山本 英 春 君 畫

# 龜甲組

全三冊

本報は大坂新報紙上に連載して大好評を博せし事實小説であつて、事は明治貳拾壹年に起り、當時一府三縣の警察界を騒がせし陰慘凄愴なる一大虐殺事件である、編中に活動する人物には、剛快不敵の壯士あり、出沒不思議の怪賊あり、泣血苦節の美人あり、薄命可憐の處女あり、個々入り亂れて各有趣味の大活動をなし、一讀骨動き肉を躍らしむべき、血と涙に満た面白い小説である。

本報種彩色頗美本  
各一冊五十錢 送料一冊二付六錢  
三冊二付八錢

江見水露君作 八幡白丸君畫

# 大正五人女

全五冊

中央新聞掲載小説  
本報種彩色頗美本挿入  
定價各一冊五十錢宛送料各一冊六錢宛  
全五冊一時に御注文の方に限り送料共に  
特價金貳圓(但し内地限り)

本書は過去に於ける數多き水露先生の作物中にて最も拔群傑出せる最長の雄篇にして編中に活躍する女の種類には、女優、藝妓、猛獸使ひの女、富豪の奥様、墮落女學生、賢夫人、薄馬鹿女中、淫婦、毒婦、菩薩、夜叉、個々入り亂れて興味深き大活動をなし舞臺の變化幻奇妙怪を極めて、實に近來稀に見る面白き一大活動小説である。

江見水露君作 八幡白丸君畫

# 三怪人

全四冊

中央新聞掲載小説  
各冊共本報種彩色密書挿入  
各一冊實價金四十五錢宛送料四冊二付八錢但内地限り  
一團の怪賊あり、其行動の幻奇妙怪、神没鬼出にして、暮顯晦捕捉するに難く、且其犯跡の陰險兇猛、空前未聞なる深刻と毒辣を極め、一時に有名なりしチゴマ、ボンノ一の徒輩をしても、遠く三舎を避けしむる程である、彼等を獲んが爲に我探偵界の巨人は、如何に戦慄すべき悪争苦闘を経たか、其處に讀者の心血を衝動すべき、骨を刺し肉を刻む的に愉快壯烈なる消息がある、此怪奇絶妙の冒険を寫すに、老巧にして且凄絶なる水露先生の靈をもつて、海に稀に見る近來の活小説



島川七石君作 山本英春君畫

戀のしがらみ 全三冊

木版手摺極彩  
美人挿畫附

定價各一冊五十錢宛

送料各一冊六錢

全六冊一時に御注文  
の方に限り送料共に

特價 貳圓五拾錢

(但し内地限り)

蘭子と信吉 全三冊

本書は、著者が一代の心血を傾注して創作せられし一大雄篇にして、其内容たるや、主人公は健實なる志想を抱いて帝都に苦學する一青年を以てし、此快男子に配するに、可憐なる麗人、失戀の令嬢、奸誘憎むべき賣國奴、刺客、女優、老政治家、歌妓、亡命の志士、不良青年、變裝刑事、其他社會に在らゆる階級の人物をば、舞臺の變化と共に活躍せしめて、以て讀者を起伏重疊たる情海の波瀾の中に捲き込まんとする、眞に近來稀に見る良家庭小説にして、又絶好の立志的戀愛悲劇小説である、乞ふ愛讀を賜はらん事を。



717
894



終

